

「仰げば尊しわが師の恩」に報いる

京都産業大学名誉教授 功 所

六十年以上前に田舎の小・中・高校で学んだ私共の世代にとって、卒業式の最後に「仰げば尊し」を唱和することは定番であった。近ごろはほとんど歌われなくなつたようだが、今こそ各自の「わが師」を考え直す縁としたい。

この歌は、明治十七年（一八八四）文部省編の唱歌教科書『小学校唱歌集』に初登場する。作詞者は明示されていないが、同一年に米国留学から帰り、東京師範学校の校長と音楽取調掛を兼ねた伊沢修二（一八六一—一九一七）とみられる。

その原曲は長らく不明であったが、十数年前、英語学者の櫻井雅人氏により、一八七一年（日本における明治四年）米国で出版された楽譜集に収載の "Song for the Cross School" と判明した。

しかし、原曲の歌詞には、卒業して別れる友達や教育への哀惜しかないが、伊沢は「わが師の恩」への感謝も、また「身を立て名をあげ」る洪意も、さらに「蛍のともしび

梁川星巖・紅蘭—おどりの夫婦の足跡

京都産業大学名誉教授 功 所

母校・岐阜県立大垣北高等学校の校庭には、当地出身の漢詩人・梁川星巖が道鏡を退けた和氣清麻呂を賛えた七言律詩の石碑が建つ。そのため、星巖は高校入學当初から気になる存在であり、在學中に出版された『星巖全集』（全五卷／四千頁近くを収載）を図書館で見かけたが、当時は漢詩が難しく感じられ、あまり馴染めなかつた。

時は流れ、私が東京から京都へ転動した四十歳の頃、親友に勧められ詩吟を習い始めた。その時、最初に覚えたのは奇しくも星巖作の「芳野懷古」である。その後、鴨川の緑の川端丸町東で星巖晩年の邸址を発見し、京都東山の靈山に建つ星巖の顕彰碑にも触れて、いつしか星巖の生き様への関心も強まつていった。

そんな折、大原富枝さんの名作『梁川星巖・紅蘭—放浪の驚鴻』（昭和四十八年、淡交社）を手に入れて味読した。そこには星巖が豪快な自由人であり、十五歳年下の流妓・紅蘭を妾として二十数年間も一緒に全国を動ね歩いた天下

二十代には江戸で遊学していた星巖だが、三十二歳で結婚すると、紅蘭を連れて西日本の各地を巡る。六年後に一旦帰郷するが、その後再び京都と近畿を廻るようになり、多彩な人々と出会っている。

四十四歳からは再度江戸に出て、詩塾「玉池吟社」を中心に活躍し名声を博した。さらに五十八歳で再度京都に転居し、同好の文人や公家だけでなく、来訪する志士たち（吉田松陰・西郷隆盛など）と交流するようになる。そのために尊皇派の重鎮と見なされたが、「安政の大獄」（一八五八年）の直前に「虚刑制」で処刑されている（十歳）。

星巖は、何故これほど破天荒な人生を瀟灑できたのだろうか。その要因は星巖に強烈な意志と非凡な詩才があり、それを高く評価する物心ともに豊かな応援者が各地に数多くいたからであろう。さらに、水墨画の巧みな女流詩人としても活動した紅蘭による内助の功が大きい。

最近京都の古書店で、嘉永二年（一八四九）春に、紅蘭の描いた梅花に星巖が賛を加えた軸を手した。その五言絶句には、「玉宇無纖翳 寒蟾乍吐華 便携一鷗 酒 溪上醉 梅花」とあり、落南に出かけて花見を楽しむが夫と（星巖六十一歳、紅蘭四十六歳）の姿が偲ばれる。